

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K16965

研究課題名(和文) ケアの臨床現場における間身体性に関する人類学的研究

研究課題名(英文) Anthropological Study on Care Practices and Intercorporeality

研究代表者

中村 沙絵 (Nakamura, Sae)

京都大学・アジア・アフリカ地域研究研究科・准教授

研究者番号：80751205

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：一連の研究活動を通して「感覚(の)人類学」における議論との関連性がより明確になったと同時に、感覚に注目した民族誌的記述の意義について理解を深めることができた。従来の主要な議論は、研究者が感覚の文化的構築に重きをおくか、特定の感覚/感覚スキルがアクターをとりまく環境との相互行為のなかで浮上するダイナミックな過程に焦点をあてるかという点をめぐって展開してきた。これに対し本研究は、感覚的経験の柔軟性・可変性と、そうした経験に形を与える文化的カテゴリーの働きの双方に目を配った記述の重要性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民族誌はある文化についての客観的な記述であるというよりは、特定の文脈に置かれた調査者と調査対象者とのあいだの感覚をも含む相互感化の過程でつくられるテキストでもある。他者の感覚的な経験に着目する意義は、視覚・言語中心主義的な西洋近代の認知のあり方を相対化する点にのみあるのではなく、特定の歴史的・社会的状況を生きる人々の生の断面で生じる広義の情動体験を捉え、可能な限り了解可能性を担保した記述を行う点にある。その過程で、調査者自身の感覚のあり方は必要に応じて見直され、翻訳の作業がつづく。本研究では伝達可能な理解を産出するのに寄与しうるような感覚に着目した民族誌的記述の手法と意義を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Through a series of research activities, the relevance of the debate in the "anthropology of the senses" has become clearer. At the same time, we have gained a better understanding of the significance of ethnographic descriptions that focus on the senses. The main traditional debate has been whether the researcher is focused on the cultural construction of the senses, or whether it focused on the dynamic sensual processes that emerge in the actors' interaction with their surrounding environment. This study has demonstrated the importance ethnography which pays attention to both the flexibility and variability of sensory experience and the cultural factors that give shape to such experiences.

研究分野：文化人類学、南アジア研究

キーワード：ケア 感覚 民族誌の実践 了解可能性 間身体性

1. 研究開始当初の背景

「情動が認知を規定する」という脳科学の発見に伴い、情動に関わるコミュニケーションをその本質的な要素の一つとする ケア への理解が改めて見直されている。このケアをめぐる新たな見方は、ケアという現象を、「する側」から「される側」への一方的行為や、独立した主体同士の相互行為としてだけでなく、自他非分離の次元における 情動=触発 のプロセスとして捉えることを提唱する [松嶋 2013]。つまりここでは、病 や苦悩を抱えた者に意図せずして「巻き込まれ」、自ら傷を帯びてしまう 被傷性 や、身体が思わず動き出してしまう 応答性 といった、間身体性の経験から、ケアの営みを照射するという方向性が打ち出されているのである。ケア論とは、上述のような他者への志向性が原初的に組み込まれた身体的存在として、人間存在を捉え直していく学的営為ともいえる。

一方、文化人類学は、病 や苦悩を抱えた者に対する、人々の関わりや情動のありようを、その多様性において解明してきた。生死をめぐる人々の行為や態度が、たとえ一見、「非倫理的」または「非人道的」にみえたとしても、それを社会構造に組み込まれた情動の発露として解釈したり [Rosaldo 1980]、政治経済的文脈に状況づけられたものとして記述することで [Scheper-Hughes 1990]、了解する道筋を示してきたのである。しかし、こうした研究の限界は、「自己/他者」という明確な切り分けを前提としたために、調査者自身が、調査地の人々とともに間主観的・間身体的世界を生きていたという事実への省察が、不十分にしかなされていない点にある [菅原 2002]。その結果、「彼ら」の経験は論理的に解釈することはできても、直観的「わかる」ことは不可能だとする、相対主義的な理解に留まってきた。

実際には、病 や苦悩を前にしたときの身体的・情動的反応には、人に共通する身体経験と、文化的な構築過程/政治経済的文脈との双方が、複雑に絡みあいながら表出していると考えられる。このことは、申請者がスリランカの老人居住施設での研究を通じて考えてきたことでもある。人の苦悩が露呈する看取りの臨床現場をフィールドとした申請者の研究は、病 や苦悩を前にしたときの身体的・情動的反応こそが、「彼ら」と地続きに存在する「私」を浮かび上がらせると同時に、「私」の自然化された感覚を根本的に問い直す契機にもなることを示すものであった。

2. 研究の目的

情動や間身体性といった前言語的な領域への注目を背景に、ケア論が改めて見直されつつある。なかでも、病を抱える他者に意図せずして巻き込まれ、思わず動き出してしまうといった間身体的な経験から、ケアの営みを照射するという方向性が打ち出されている。しかし、情動や間身体性の領域と関わる経験が、行為者たちをとりまく環境や文脈といかに関わり合うかという点は、まだ十分に検討されていない。

本研究は、ケアにおける間身体性の経験が、行為者をとりまく環境世界によって如何に媒介されているかを記述・分析するにあたり、方法論的な課題を検討した。とりわけ、ケアをめぐる間身体性の経験を記述・分析するにあたり、研究者自身の感覚経験や感覚スキルをいかに位置づけるかが問題であることから、近年興隆してきた「感覚(の)人類学」のこれまでの議論を振り返り、その成果を批判的・発展的に継承することを目指した。

3. 研究の方法

これまで書き留めてきたフィールドノートの読み直しと、これを補完する現地調査をもとに、民族誌的記述に関する方法論的な議論をおこなった。その際、類似の興味関心をもつ研究者と議論を重ね、国内外での学会で発表・討議を行いながら、共通の課題や可能性について検討した。

4. 研究成果

非西洋社会を対象とする感覚に着目した民族誌的研究のなかには、そこでの感覚の在り方を通して、視覚・聴覚(言語)中心主義の西洋近代社会の存在様態や近代科学の認識論を相対化することを目的とするものが多くみられる。南アジアに関する研究でも、身体や感覚をめぐる「インド的な視点」(“Indian perspectives”)をとりいれることで、感覚や知覚に関する近代科学的な枠組みの再考をせまるといった方向性が示されてきた [Michaels and Wolf 2014: 7]。インド世界における知覚・感覚の在り方やそれらに付与される多様な意味は、主に知覚・感覚をめぐる文献の読解や、儀礼や芸能などにかかわる人々の実践を通して考察されてきた。このように感情(emotion)の人類学をめぐる議論 [e.g. Lutz 1988] と同じく、感覚(の)人類学においても、文化的/社会的構築性を強調する傾向は根強い。

しかし本研究では、このようなアプローチにとどまらない記述を模索した。しばしばいわれるように、感覚そのものは目に見えず、それを調査の対象とすることは困難を極める。し

かし、民族誌というものはある特定の文脈に置かれた調査者とインフォーマントとのあいだの、感覚をも含む相互作用・相互感化の過程においてつくられるテキストでもある。フィールドにおいて、他者の感覚的な経験とダイナミクスは、単に視覚中心的・言語中心的な（「西洋近代的」とされる）認知の在り方を相対化したり、あるいはそれと比較したりするためだけではなく、ある歴史的・社会的状況を生きる当事者の生の断面で生じる広義の情動体験を捉えるために記録されることがある。こうした性格をもつ記録データをもとに民族誌を書く際、感覚への着目は、私たちの最も親密な体験の仕方の自明性を問うためだけでなく、記述された出来事への理解可能性や「体験の共通性」[鯨岡 2005]を担保するための重要な要素にもなりうるのではないか。

一連の研究活動を通して「感覚（の）人類学」（anthropology of senses/sensory anthropology）における議論との関連性がより明確になったと同時に、感覚に注目した民族誌的記述の意義について理解を深めることができたと考えている。感覚の人類学／感覚人類学における主要な議論の一つは、研究者が感覚の文化的構築に重きをおくか、特定の感覚／感覚スキルがアクターをとりまく環境との相互行為のなかで浮上するダイナミックな過程に焦点をあてるかという点をめぐって展開してきた。両者は「文化」概念や感覚／知覚主体としての人間観において激しく対立する。しかしスリランカの老人施設という近代的な文脈で浮上しつつある新たなケアの関係性を理解するには、私たちの感覚的経験の柔軟性・可変性と、そうした経験に形を与える文化的カテゴリーの働きの双方に目を配った記述が必要である、ということが改めて明らかとなった。

まず感覚は、他者やその経験に接続する／つながる媒体としての役割をもっている。私たちは言葉や意味世界で担保される間主観性の領域だけでなく、身体や感覚を介して直接的につながる（つながってしまう、曝される）ような世界を生きている。次に、こうした経験はありふれてはいるが、感覚がとりわけ記録・記述の対象となるのは、特に他者の生の断面で生じる広義の情動体験、その場限りの一回生の体験を捉えたいという欲動が観察者の側に生じるときである。第三に、その体験について分析的な言語で語ることは難しく、記述的な言語が必要とされる。伝達においてはオーディオや写真など言葉以外の媒体を取り入れることもできるが、文脈への深い理解いもとづく厚い記述の重要性は失われない。むしろ言語は、用いられた言葉の一般的あるいは技術的意味以上の含意をもつことで、遭遇の肌触りを伝達することが期待される。最後に、感覚を前景化させる記述の意義の一つは、他者の生きられた経験について伝達可能で共有可能な理解を産出する点にある。感覚に着目する民族誌は、人々の生活世界に関する客観的な叙述という性格をこえて、主体間あるいは主体内の異なる経験や現実を橋渡したり、伝達するような可能性を秘めていると考えられる。

【引用文献】

Howes, D. 2003. *Sensual Relations: Engaging the Sense in Culture and Social Theory*. Univ. of Michigan Press.

Pink, S. 2009. *Doing Sensory Ethnography*. Sage Publications.

Ingold, T. 2011. Worlds of Sense and Sensing the World: A Response to Sarah Pink and David Howes. In *Social Anthropology* 19(3):313-317.

Michaels, A., and Wolf, C. 2014. "Exploring the Senses in Rituals and Performances: An Introduction" in Axel Michaels & Christoph Wolf eds. *Exploring the Senses*. Routledge.

Eck, D. 1985. *Darshan: Seeing the Divine Image in India*. Columbia University Press.

鯨岡 峻. 2005 『エピソード記述入門 実践と質的研究のために』東京大学出版会.

Lutz, C. 1988. *Unnatural Emotions: Everyday Sentiments on a Micronesian Atoll and Their Challenge to Western Theory*. University of Chicago Press.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中村沙絵	4. 巻 31
2. 論文標題 学会近況 日本南アジア学会30周年記念シンポジウム（第5回）『感覚からみるインド世界』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 南アジア研究	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中村沙絵、Udeni Appuhamilage、飯田玲子、梅村絢美	4. 巻 31
2. 論文標題 学会近況 英語パネル Ways of Sensing, Ways of Being: Sensory Anthropology from/among the Asia	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 南アジア研究	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中村沙絵	4. 巻
2. 論文標題 健康格差からみるスリランカ社会 医療行政の展開に着目して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 NIHU事業南アジア地域研究京都大学中心拠点研究グループ2成果報告集	6. 最初と最後の頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 中村沙絵	4. 巻 29
2. 論文標題 書評 石井美保『環世界の人類学 南インドにおける野生・近代・神霊祭祀』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 南アジア研究	6. 最初と最後の頁 185 - 190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） https://doi.org/10.11384/jjasas.2017.185	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村沙絵	4. 巻 -
2. 論文標題 「「多民族」状況を生きるスリランカのムスリムたち」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『アジアに生きるイスラーム』	6. 最初と最後の頁 282 - 303
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村沙絵	4. 巻 -
2. 論文標題 高齢者ケア	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 インド文化事典編集委員会編 『インド文化事典』	6. 最初と最後の頁 102-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村沙絵	4. 巻 -
2. 論文標題 スリランカの映画事情	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 インド文化事典編集委員会編 『インド文化事典』	6. 最初と最後の頁 547
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakamura Sae	4. 巻 4
2. 論文標題 Rethinking the Ethics of Paliative Care: An ethnographic case study of an Old Age People 's Home in Southwest Coast of Sri Lanka	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 RINDAS International Symposium Proceedings (4) "2015 INDAS-UCB International Conference, Rethinking Religion, Ethics, and Political Economy in India and Sri Lanka: Critical perspectives from Japan "	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中村沙絵	4. 巻 16-2
2. 論文標題 書評「戸田美佳子『越境する障害者 アフリカ熱帯林に暮らす障害者の民族誌』」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ地域研究	6. 最初と最後の頁 185-187
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) http://www.asafas.kyoto-u.ac.jp/dl/publications/no_1602/AA1602-03_BR.pdf	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計18件(うち招待講演 9件/うち国際学会 5件)

1. 発表者名 NAKAMURA Sae
2. 発表標題 Bodily sensations and ethical relations: A reflection on the sensuous interaction between care-givers and dying residents at a home for elders in Sri Lanka
3. 学会等名 ICAS (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 少子高齢化を迎えたスリランカの世代間関係と社会福祉
3. 学会等名 比較家族史学会(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 ダーナの「悦び」のつくられかたスリランカにおける社会奉仕実践と布施の現場から
3. 学会等名 日本文化人類学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 スリランカにおける原因不明の腎臓病（CKDue）をめぐるヘルス・アクティヴィズム
3. 学会等名 国立民族学博物館・共同研究「心配と係り合いについての人類学的探求」第3回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 NAKAMURA Sae
2. 発表標題 Destitution in Old Age: Living through Asymmetrical Relationships
3. 学会等名 The 10th INDAS-South Asia International Conference, “Inclusive Development in South Asia”（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 Destitution in Old Age: Living through Asymmetrical Relationship
3. 学会等名 2018年度 第三回FINDAS研究会（INDAS国際シンポジウム “Inclusive Development in South Asia” 事前研究会）（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 NAKAMURA Sae
2. 発表標題 Bodily sensations and ethical relations: A reflection on the sensuous interaction between care-givers and dying residents at a home for elders in Sri Lanka
3. 学会等名 日本南アジア学会第31回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 『原因不明の腎臓病』のポリティカル・エコノミー：健康格差からみるスリランカ社会
3. 学会等名 2018年度『KINDAS研究グループ2研究報告集』第1回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 老年期の不調に対する非専門家によるケア実践とコミュニケーション スリランカの事例から
3. 学会等名 第10回日本ヘルスコミュニケーション学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sae Nakamura
2. 発表標題 Does Charity Wound? Micro Analysis of Interaction among Dwellers at a Home for Elders and Dana Donors
3. 学会等名 International Centre for Ethnic Studies (ICES) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Sae Nakamura
2. 発表標題 Communicative Body: An Ethnography of Old Age People's Home in Sri Lanka
3. 学会等名 Monthly Academic Circle of Department of Social Studies, Open University of Sri Lanka (OUSL) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 スリランカ国内における家事使用人の研究に向けた予備的考察：準家族的な立場からの介護・養育実践に着目して
3. 学会等名 KINDAS (NIHUプロジェクト南アジア地域研究・京都大学拠点) 研究グループ2 第二回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 施設での老後を支える関係性：スリランカ西南部シンハラ社会の事例から
3. 学会等名 第40回スリランカ研究フォーラム (招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 「元・人間」・死にゆくパーソン・ケアの関係倫理
3. 学会等名 現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究 民博共同研究会 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 スリランカ お布施が支える地域の老後
3. 学会等名 妙心寺・吉祥院 メダカの学校 (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Nakamura Sae
2. 発表標題 Anthropology of Suffering Revisited: a case study of suffering and care in an old age people's home in Sri Lanka
3. 学会等名 AAS-in-Asia 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 スリランカのムスリムと民族間関係
3. 学会等名 笹川平和財団「アジアのイスラム」事業 第4回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 中村沙絵
2. 発表標題 響応する身体 スリランカの老人施設ヴァディヒティ・ニヴァーサの民族誌
3. 学会等名 樫山財団・京都大学出版会 若手研究者セミナー
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 中溝和弥、中村沙絵、拓徹 編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 京都大学・南アジア研究センター	5. 総ページ数
3. 書名 南アジアにおける民主政治と国際関係	

1. 著者名 中村沙絵	4. 発行年 2017年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 390
3. 書名 響応する身体 スリランカの老人施設ヴァディヒティ・ニヴァーサの民族誌	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----